



廣田 恵さま

『どうしてないているの?』

**ディック・ブルーナ 文・絵
まつおか きょうこ 訳
福音館書店**

新米ママだったころ、私は赤ちゃんが苦手だった。生まれた瞬間から「おぎゃあ!」と泣き、お腹が空いては泣き、おむつが濡れては泣き、起きている時間は泣いてばかり。「赤ちゃんは泣くのが仕事」とはいうけれど、当時の私は我が子の泣き声を聞いたたびに「また始まった」とため息をついていた。

やがて我が子はよちよち歩き出し、「おなかすいた」「おしっこ」など、少しずつ言葉を話すようになった。けれど、思い通りにならないだけで涙する姿は変わらず、「そんなことで泣かないでよ!」と、つい強く言ってしまうこともあった。

そんなときに出会ったのがディック・ブルーナの『どうしてないているの?』という絵本だった。主人公の女の子が、「豆が嫌い」「鉛筆の芯が折れた」「クマちゃんの目がひとつとれた」などと泣いている姿はまるで我が子のように、私は苦笑しながらページをめくった。

ところが、いざ我が子に読み聞かせをしてみると、くすりとも笑わない。それどころか、驚くほど真剣な表情で聞いている。そして、泣いていた女の子が照れくさそうに笑いながら、「こんなことで なくなんて、わたしって へんなこ?」ときく最後のシーンで、即座に答えた。

「ゼーんぜん、変じゃないよ!」

そのときの衝撃はいまでも忘れられない。なんてまっすぐで優しい言葉だろう。そう、涙にはちゃんと理由があるのだ。大人でも子どもでも、それは変わらない。

それからというもの、私は子どもが泣いているときは、必ずその理由をたずねるようにしている。どんなに小さな理由でも、子どもにとっては大切なこと。その声にきちんと耳を傾け、真剣に受け止められる母になりたい。そして、あの日、子どもがくれたまっすぐな言葉を、そのまま返してあげたい。

「泣きたいときは、泣いていいんだよ。ゼーんぜん、変じゃないよ!」